石田王の卒かる時に、丹生王の作る歌一首
并せて短歌

四二〇番

なゆ竹の　とをよる御子　さにつらふ　我が大君は　こもりくの　泊瀬の山に　神さびに　斎きいますと　玉梓の　人そ言ひつる　およづれか　我が聞きつる　たはことか　我が聞きつるも　天地に　悔やしきことの　世の中の　悔やしきことは　天雲の　そくへの極　天地の至れるまでに　杖つきも　つかずも行きて　夕占問ひ石占もちて　我がやどに　みもろを立てて　枕辺に斎瓮をすゑ　竹玉を　間なく貫き垂れ　木綿だすき　かひなにかけて　天なる　ささらの小野の　七ふ菅　手に取り持ちて　ひさかたの　天の川原に　出で立ちて　みそぎてましを　高山の　いはほの上に　いませつるかも

反歌

四二一番

およづれの　たはこととかも　高山の　いはほの上に君が臥やせる

四二二番

石上　布留の山なる　杉群の　思ひ過ぐべき　君ならなくに